

コミュニケーション

積極的な情報開示と対話により
社会のみなさまとの良好な関係を築きます。

ステークホルダーミーティング

各方面のステークホルダーにご出席いただき、ゼロ・エミッションへの取り組みをテーマに初めてのミーティングを行いました。

大和ハウス工業は「ステークホルダーとの積極的な対話」を実現すべく、ステークホルダーミーティングを開催しました。開催初年度の今回は「施工現場でのゼロ・エミッションへの挑戦」に焦点をあて、1000棟以上の現場でゼロ・エミッションを達成している三重工場において「建設副産物工場デポ化プロジェクト」（工場デポ）の現場

をご覧頂きました。さまざまなステークホルダーの方に出席していただき、当社の取り組み（廃棄物削減、商品における取り組み、環境報告書等）について色々な角度からのご意見をいただきました。



① 出席された皆さまに環境への取り組みをご説明
② 施工現場から回収され、分別・集積された建設副産物の見学



③ 当社の取り組み（廃棄物削減、商品における取り組み、環境報告書等）における有意義な意見交換ができました。

開催日時：2004年10月22日 10:00～15:00

開催場所：大和ハウス工業（株）三重工場
（三重県三重郡菟野町）

参加ステークホルダー 12名：

- ・コーディネーター
（京都精華大学講師 服部静枝先生）
- ・NPO／環境市民理事（1名）
- ・入居者（2名）
- ・地域行政／菟野町役場環境課（1名）
- ・近隣企業（1名）
- ・学生（5名）

主なご意見と回答

■ゼロ・エミッションと建設副産物工場デポ化プロジェクトについて

ステークホルダーミーティングでのやりとり

○ご意見

100%リサイクルを目標にしていると、一部ではかえって環境負荷が増えることもありうると思いますが、この部分についてはどう考えていますか？

○ご意見に対する回答

リサイクルするためにより遠方に運搬したりすることにより、別の側面で見ると環境負荷がかかっているものもあります。リサイクルすべきかするべきでないかの分岐点があると思いますが、現時点では分岐点がどこにあるのか分析できておらず、そういう意味では当社のゼロ・エミッションはまだ粗いと言えるかもしれません。現在は全員のベクトルを単純な目標である「ゼロ」に合わせて活動している段階であり、分岐点の見極めは今後の課題と考えています。

その後の取り組み状況

本レポートのP.47にも掲載しておりますが、施工現場でのゼロ・エミッションはその後順次進めており、現在累積で9000棟を超えることができました。2005年度末には新築住宅施工現場でのゼロエミッションを達成する予定ですので、次の段階では更に高い次元での環境負荷の低減を考えてまいります。



三重工場

■商品における取り組みについて

ステークホルダーミーティングでのやりとり

○ご意見

様々な環境配慮技術があるがあまり売れていないという話でしたが、環境に良くても売れないのは商品の魅力が足りないからではないでしょうか。商品の魅力と環境の両立について経営サイドや営業サイドのご意見を聞かせてください。

○ご意見に対する回答

環境商品以外と同じ土俵で戦っても勝てるものをつくるのが現在の当社のテーマだと考えます。環境に良いことをセールスポイントにするのではなく、環境に良いだけでなくモノとして良いから売れる、というものをつくっていくことが商品開発に問われている課題と考え取り組みを進めたいと思います。

その後の取り組み状況

環境行動計画2005（P.34に掲載）でもおわかりいただけと思いますが、商品における環境配慮の目標を明確にし、経営と環境の両立という課題に積極的に取り組んでいます。特に財団法人建築環境・省エネルギー機構による認定制度「環境共生住宅」の普及を積極的に推進しており、なかでも「街並みに調和する外構造園の実施」「高断熱・高気密仕様による環境負荷の低減」「健康住宅仕様による優れた室内環境の実現」に注力してきました。

その結果2004年度も昨年に引き続き「環境共生住宅認定」の建設実績1位（836戸）を達成することができました。当社は今後も環境への配慮に積極的に取り組み、2007年度には新築戸建住宅の50%を環境共生住宅とする目標を設定しています。

■環境報告書について

ステークホルダーミーティングでのやりとり

○ご意見

環境報告書は誰を対象にかけられているのかわかりません。
・2004年度の環境・社会報告書はストーリーがあり、ページ構成も読みやすかったが、多くの項目を網羅しており、特色を出し切れていないと思います。



環境・社会報告書2004

○ご意見に対する回答

環境報告書の想定読者については、われわれも毎回悩んでいます。環境報告書ガイドラインではあらゆるステークホルダーを対象とするように書かれていますが、この条件を満たしながら、それぞれのステークホルダーにわかりやすく書いていくことが今後の課題と捉えています。

その後の取り組み状況

このご意見をいただき、「CSRレポート2005」では企業市民としての取り組み（P.53～64）を対象となるステークホルダー（利害関係者）ごとに報告するよう心がけました。

また、「共に創り共に生きる」の言葉からレポートを展開していく試みや「あ・す・ふ・か・け・つ」のキーワードを用いて、事業を通じて社会に何ができるか（できたか）を報告するなど独自性を出すことに努めました。

ステークホルダーミーティングに参加して

（ミーティングのコーディネーターによる総括）

初回の試みとして開催されたステークホルダーミーティングでしたが、総じて成功だったのではないのでしょうか。

反省点を申し上げますと、全体的に時間が少しタイトだったことが挙げられると思います。例えば、環境活動に関わる写真や活動実績などを展示した「環境広場」を、もう少しゆっくり見たいと思いました。また、本題のミーティングにおいても、もう少し時間的余裕があればそれぞれのテーマを掘り下げることが出来たでしょう。

とはいえ参加者の皆さまからは有意義なご意見を伺うことができました。その一つで、今回の重要なポイントが「利益と環境保全の両立」ではなかったかと思えます。これは全ての企業に共通する、環境経営の課題です。「環境」というと「商売」とは別物と考えられがちですが、環境活動を経営活動と一体化させてこそ、利益と環境保全の両立が実現出来るはずで、先ずは経営とリンクした環境目的・目標を設定する工夫も必要ではないかと思えます。それによって、全社員が一丸となって更に前向きな取り組みを推進できるでしょう。

京都精華大学 人文学部環境社会学科 講師
服部 静枝

環境・社会報告書については参加者からも意見が出ていましたが、「見やすさ」という点では工夫の余地があります。報告書を読む対象となるステークホルダー別に、必要項目だけを取り上げた「簡易版」を作成するのも有効です。

今後は、防犯・防災・耐震設計やサプライチェーンへの対応などCSR（企業の社会的責任）という広い視点から、ミーティングのテーマを探してみるのもよいのではないかと思います。

また、シックハウスの原因である有害化学物質削減への取り組みなどについては、せつかく早くから取り組んでこられたのですから、こういったミーティングの場を活用して積極的にアピールしてはいかがでしょうか。

最後になりますが、今回は工場に住まいづくりの現場を見学させていただき大変有意義でした。今後の活動において益々の発展を期待します。